

札幌市交通局 東西線

6000形 On the road



「電車は地上を走る。」

それが当たり前である。
しかし、日の目を浴びることなく、ひたすら札幌の地下を走り続ける電車が存在する。
来る日も来る日も地下トンネルを走り続ける。
その電車が地下を走り終えて日の目を浴びたとき、それは廃車・解体されることを意味する。

実際に日の目を浴びているところを見たことがあるだろうか？

谷口 与鹿

札幌市交通局 東西線 6000形 On the road

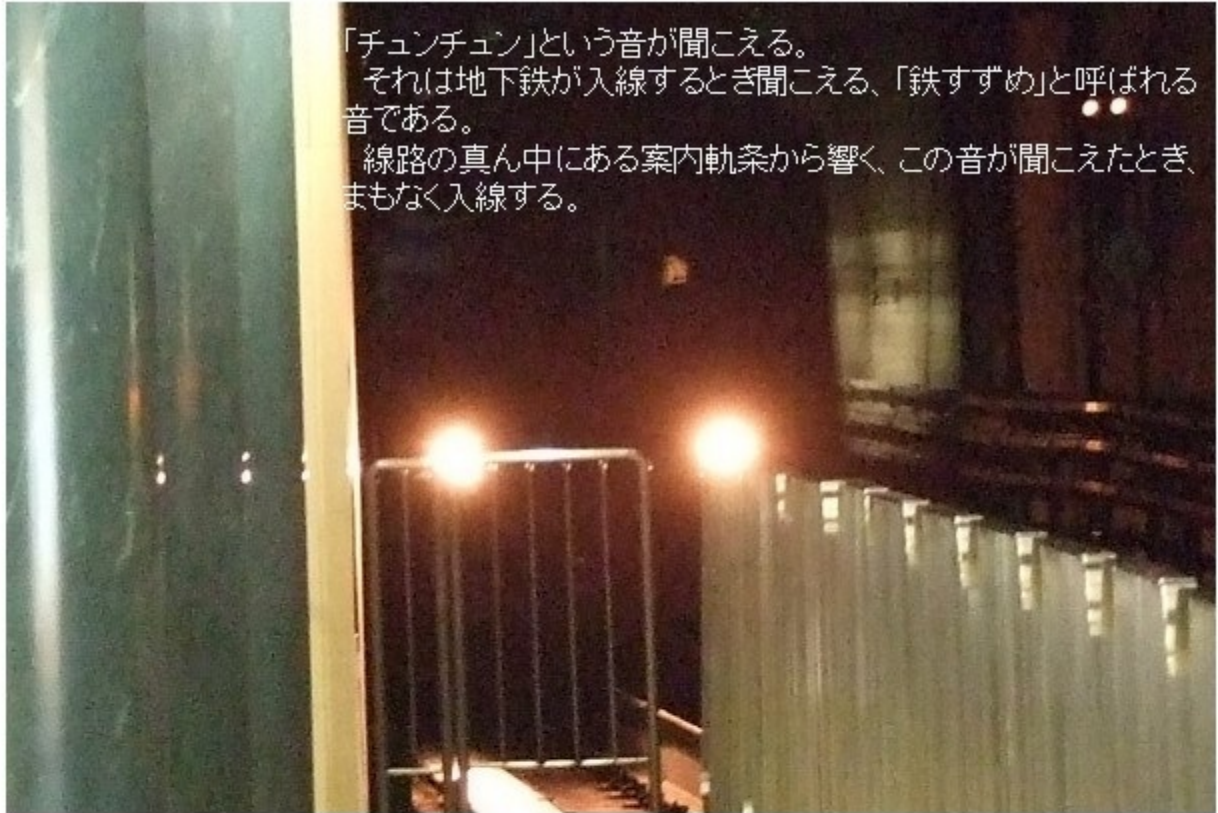


「電車は地上を走る。」

それが当たり前である。
しかし、日の目を浴びることなく、ひたすら札幌の地下を走り続ける電車が存在する。
来る日も来る日も地下トンネルを走り続ける。
その電車が地下を走り終えて日の目を浴びたとき、それは廃車・解体されることを意味する。

実際に日の目を浴びているところを見たことがあるだろうか？

谷口 与鹿



「チュンチュン」という音が聞こえる。
それは地下鉄が入線するとき聞こえる、「鉄すずめ」と呼ばれる音である。
線路の真ん中にある案内軌条から響く、この音が聞こえたとき、まもなく入線する。



姿を現したのは札幌市交通局地下鉄東西線6000形電車603号車だった。

しかし、この電車は平成20年3月に地下から姿を消した。

Day 1

雪が少しずつ融けゆく中、日々仕事に追われていた。だんだんと帰りが遅くなり、日付が変わる前に会社を出ることはできても車で程なく走ったところでカーラジオからジェットストリームが流れてくる。そう日付が変わってしまったのである。これを聴くたびに「今日も睡眠時間が少ないな」、「明日は仕事のペースが落ちるな」と思いながら家路に着く。

上司を家に送ってから自分の家に向う途中、青い光を点滅させながら交差点を走り抜けたトレーラーを見かけた。路地の隙間から見えただけなので最初は鉄骨か何か大きいものを運んでいるのだらうと思っていた。そのトレーラーが走っていった道は私の帰り道でもあったのでそのまま走ってみると、トレーラーは低速で走行していたためすぐに追いつくことが出来た。

そこで目にしたのは、深夜の札幌新道をトレーラーヘッドに牽引されている「地下鉄の車輌」

であった。





私が好きな札幌市交通局地下鉄東西線に使用されていた6000形であった。廃車回送されている姿は非常に悲しいものがあった。やっと外の世界に出ることができた。しかし、札幌の地下鉄が走り続けた後に外に出るということは「死」を意味する。そう解体されるのである。

私が見た車輈は6000形の中間車であった。外見はドアが開いているだけの車輈に見えた。見るも無残な姿となり、内装は取り除かれ骨が見え、ドアは外され、取り外されたシートが車内に転がっていた。車番にはうっすらと「6203」と見えた。

私はカメラを持ち歩いていなかったため、すぐさま携帯のカメラで撮影した。写りが悪いのは仕方がない。

運が悪いのかトレーラーは赤信号で停まらないように運転していて常に動いているために写真がぶれてしまう。
撮られたくなかったのだろうか？

普段、札幌の地下鉄を下から見るなんてできないので、非常に珍しい光景であった。しかし、車輈基地に電車が搬入される時は陸送で来るのだから、増備される時は見ることができる光景なのかもしれない。ただ私は未だかつて新車の搬入に遭遇したことはない。

次の日も仕事のため、何枚か写真を撮ってから帰宅。

Day 2



この日も仕事で遅くなりジェットストリームを聴きながら車を運転していると、また廃車回送に遭遇。この日は2両の中間車が運ばれていた。

車番には「6303」と「6403」とあった。この日も前日と同じ場所で写真を撮って帰宅した。



Day 3

中間車だけに遭遇し、先頭車には遭遇していない。やはり先頭車も見たい。そろそろ先頭車が出てくるのではないだろうか？と推測しながらカメラを持って出かけた。

すると、南郷通りの交差点を走っていく先頭車両を発見。国道12号線に先回りして先頭車と中間車が運ばれているところに遭遇した。車番は「6103」と「6603」であった。先頭車が運ばれているところを写真に収めることはできた。しかし、この先頭車は頭についているマークが取り外され、貫通扉にある札幌市のマークも剥がされ見るも無残な状態であった。



次の日が休みだったため、写真を撮りながらそのまま一緒に走ってみた。廃車回送のルートが大まかにわかった。



地下鉄車両を下から見る機会なんてとても珍しい。



石狩の工業地域に入る地下鉄車両。



場所によってはまだ解体されずに残っている車両がある。それもプロトタイプである。詳しい場所については割愛させていただく。



この車両はここに置かれてからもう半年以上の月日が流れていた。今はもう解体されているかもしれない。ここで出会えたとき嬉しい一方で痛々しさにつらい思いもあった。

札幌の地下鉄の車両は雪や雨風に打たれることなく走るのだから車両自体の痛みはそうそうないと思う。実際のところはどうなのだろうか？6000形はまだまだ延命工事で使用可能のように思えた。そうすれば、8000形を導入する費用よりも安く抑えられ、札幌市交通局の赤字を減らすことに貢献できたのかもしれない。

平成20年8月にはすべてが廃車になってしまう6000形。
その残り少ない期間にまた乗れることを願う。

平成20年6月 谷口与鹿

<http://ameblo.jp/taniguchi-yoroku>